

高橋余一の「生活絵巻」



16 ほや磨き

昭和三十年代ごろまで、子どもの手伝いはさまざまでした。朝は手伝いをしてから学校へ行き、帰ってきてまずは手伝いで、遊びや宿題はその後でした。水くみ、風呂たき、妹や弟の子守り、わら草履編みなど、蚕を飼っているときは朝夕問わず桑摘みをしました。田植えと稲刈りの時期は、学校が一週間くらい休みになり、大人と一緒に田の仕事をしました。また、稲刈りの後は、田んぼで落穂拾いをしました。「絵巻」には、子どもがランプのほや磨きをしている様子が描かれます。ランプは、一晩ともすと煙のすすで真っ黒になったため、毎日磨いてきれいにしていました。

(上の絵)

子供の日課の一つ
ランプ掃除

夕方になると油煙でくもったホヤの中えフーッと息を吹き込み手を突く(フーッと息を吹く)と拭く

手の入らない先の方は紙を箸の先に付けて押し込んで手際よく拭いた

石油瓶